

証言

戦後八十年を前にして

—シアトル・ベインブリッジ島とミネソタ・キャンプサベージの悲劇—

佐々木義英

はじめに

第二次世界大戦から八十年が過ぎようとしています。戦争を直接体験した方々の声は年々少なくなっています。が、なお語り継がれる証言には、いまを生きるわたしたちに向けられた切実な訴えがあります。

とりわけ、シアトル近郊のベインブリッジ島における強制移住や、ミネソタ・キャンプサベージにおける二世語学兵の悲劇は、アメリカ国内ではよく知られた歴史であるにもかかわらず、日本ではほとんど顧みられることはありません。けれども、そこに刻まれた事実は、遠い国の物語ではなく、同じ時代に生きた人々の現実であり、わたしたちにとっても決して無関係ではない問いを投げかけています。

加えて、わたしたち教団もまた、かつて戦争に与し、人々の苦しみに正面から向き合えなかった過去を背負っています。その反省を踏まえればこそ、こうした証言に耳を傾けることが、歴史を学び直し、いまのわたしたち自身のあり方を問い直す営みになるのではないのでしょうか。

本稿では、バインブリッジ島の強制移住とミネソタ・キャンプサベージの二世語学兵の証言を紹介します。宗祖親鸞聖人の「凡夫観」や「同朋・同行」という視点を手がかりにしなが、戦争が人々に何をもたらし、その中でなおどう生き抜こうとしたのかを見つめていきたいと思います。

一、シアトル・バインブリッジ島の強制移住―奪われた暮らし―

一九四二年二月、ルーズベルト大統領が大統領令九〇六六号に署名し、日系人の強制移住が始まりました。その最初の対象となったのが、シアトル近郊のバインブリッジ島です。島には約五十世帯の日系人が暮らしており、農業や漁業を営み、地域の住民とともに生活していました。

しかし、真珠湾攻撃直後から連邦捜査局⁽¹⁾による家宅搜索や逮捕が始まり、僧侶や日本語教師など「地域の指導者」と見なされた人々が令状なしに拘束されました。島民たちは突然「非米的存在」とされ、わずか一週間で荷物をまとめ、番号札をつけてフェリーに乗せられ、列車で砂漠の収容所へと送られました。証言者のひとりは語りません。

"All I remember is my mother saying we have to ... we're gonna go on a vacation, and how excited I was about that."⁽²⁾

"... lots of times ... the windstorm would come up and oh, you'd be just covered with sand ... if you had your mouth open, you were eating the sand with your lunch."⁽³⁾

お母さんは「旅行に行くのよ」と言って、わたしたちを安心させた。しかし、実際には乾いた砂漠にバラツクが立ち並ぶだけの収容所だった。プライベートもなく、砂嵐が吹きつけ、子どもたちは砂を噛みながら食事をした。

(筆者記)

ベインブリッジ島では地元紙の編集者ウォルトとミリー・ウッドワード夫妻が唯一、日系人追放に反対の社説を掲載し続けたのです。こうした小さな連帯が、戦後、日系人が比較的安心して島に戻る土台をつくりました。しかし、それでも“the Japs should not return”という声もあり、差別は簡単には消えませんでした。

この経験が示しているのは、市民でありながら民族の出自だけで敵とされ、家も生活も奪われるという現実です。そこには、人が人を「同じ仲間」としてではなく、「排除すべき存在」と見てしまう怖さが映し出されています。

二、ミネソタ・キャンプサベージの語学兵―矛盾の中での奉仕―

一方、同じ時代に、別のかたちの訓練に直面した人々もいました。ミネソタ州のキャンプ・サベージに設置された陸軍日本語学校では、約六千名の二世兵士が学びました。彼らは、翻訳・通訳・尋問などの任務を担う軍事情報部の要員となるために訓練を受けました。

二世の多くはアメリカ生まれで日本語を十分に話せず、厳しい訓練に苦しみました。しかし、戦場に出れば捕虜の尋問や文書の翻訳を通じて、米軍にとって欠かせない役割を担うこととなりました。証言者のひとりはこちら語ります。

"I was so mad being incarcerated. I joined, but as soon as I joined I decided to do my best, do my duty."⁽⁸⁾

わたしは収容所に入れられ、怒りの気持ちで軍に志願した。しかし、一度志願した以上は務めを果たすと決めた。
(筆者訳)

キャンプ・サベージでは、言語教育にとどまらず、日本人の文化や心理を理解する力も重視されました。ある証言には、洞窟に立てこもった日本兵のもとへ丸腰で入り、百人以上の民間人を解放させた兵士の勇気が語られています。そこには、「敵」である日本兵や民間人のいのちをも守ろうとする姿が示されています。

戦後、こうした語学兵は日本占領下で通訳や翻訳を担い、日本とアメリカの橋渡し役となりました。証言の中で繰り返されるのは、「自分はアメリカ人である」という自己認識と、「家族は収容所にいるのに、なぜ自分は軍に尽くさねばならないのか」という葛藤です。彼らは、矛盾に満ちた状況の中でなお、家族や仲間を思い、与えられた務めに誠実に向き合うことで生き抜こうとしたのです。

おわりに

ベインブリッジ島と、キャンプ・サベージの二つの証言は、一見異なるようでありながら、共通して「差別と排除の中にあっても、奪われた自由を取り戻そうと懸命に生き抜かれた姿」を伝えています。その姿を前にすると、思い起こされるのは、戦争に荷担したわたしたち教団のあり方です。自らの立場や不安を優先し、国家に追従して戦争を支えた姿こそ、「凡夫」の現実を映し出しているものにほかなりません。争いや分断を生み出す心の愚

かさを、自らの問題として見つめ直さねばならないのです。

親鸞聖人はすべての人を「同朋・同行」と仰せになっています。「同朋」とは、阿弥陀仏のはたらきに照らされ、ともに煩惱にまみれていると知らされる姿であり、「同行」とは、阿弥陀仏から与えられた六字の名号のはたらきによって、ともに救い取られてゆく仲間であるということです。証言を聞くことは、この「同朋・同行」としての姿を、現代に生きる自分自身に問い直す営みであるといえます。差別されることなく、ともに生きることを求める声に耳を傾け、*“Let it not happen again”*⁽⁵⁾ という誓いを引き継ぐことこそが、戦争に与した過去を持つわたしたち本願寺派の反省を踏まえ、さらに浄土真宗が掲げる「自他共に心豊かに生きることのできる社会」を実現する道につながると思います。戦後八十年の節目にあたり、この証言に学び、次の世代へと伝えていくことの大切さを改めて胸に刻みたいと思います。

【註】

- (1) FBI (Federal Bureau of Investigation)。米国司法省に属する連邦捜査局。国内治安維持と情報収集を任務とし、当時は日系人社会の「指導層」と見なされた人物を令状なしに拘束するなど、強制移住・収容政策の先駆的役割を担った。
- (2) Lily Kodama, oral history interview, *Voices of Bainbridge Island Japanese American Exclusion* (Densho データベース収録)。
- (3) Kazuko Nakao, oral history interview transcript (Densho データベース収録)。
- (4) ウォルト (Walt Woodward) おぢむりりー・ウッドワード (Milly Woodward) 夫妻は、ペインブリッジ島の地元紙『ペインブリッジ・レビュー』(Bainbridge Review) の編集者。戦時中ただ一紙、日系人追放に一貫して反対の立場をとり続け、戦後の日系人帰還にも尽力した。
- (5) *“the Japs should not return”* は、戦時中から戦後にかけて米国西海岸の一部で使われた差別的スローガン。*“Jap”* は *“Japanese”* の略称だが、強く侮蔑的ニュアンスを持ち、差別語として用いられてきた。
- (6) Bainbridge Island Japanese American Community (BIJAC), *Voices of Bainbridge Island Japanese American Exclusion*。米国国立

公文書館所蔵資料。

- (7) 軍事情報部は、正式には Military Intelligence Service の略で、第二次世界大戦期のアメリカ陸軍に属する情報部門。特に日本語通訳・翻訳に従事した日系二世兵士たちの活躍が歴史的に知られている。
- (8) Twin Cities Public Television (TPT), Camp Savage and Fort Snelling: The MIS Nisei Linguists of World War II, Minnesota Historical Society 所蔵資料。
- (9) Bainbridge Island Japanese American Exclusion Memorial, motto inscription, "Nidoto Nai Yoni (Let it not happen again)" is the official phrase engraved on the memorial, promoted by the Bainbridge Island Japanese American Community (BIJAC).